

KODAK COLOR CONDITION MATCHES
© The Iken Company, 2000
LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



文庫
は
文庫

13
3011
4





3011
4

昭和九年
七月二日
榊末

いろはは文庫五編の序



何まゝとての咲あり梅の花と秋光
庵の妙句を武邊の行烈を看あぐるの
吟なりとうやふ記せいろはは文字四
十七士の銘傳ハ拙き筆不成といふを
いづまかともね忠臣義烈松の操は

かつむ雪間此梅の心たよく晴あしり
 あまの花の枝をうへぬる儀もゆきま
 雪の羽立朝の退口をうへぬ朝日影
 晴あしり鷹名和ふをきく静けき
 海の面千尋の底より猶深き其志
 其功を感賞はるる最浅き撰者此

五七五ハシロ一

硯の海さうも乾くもあはく退く年
 續く五番手六番手その寄を鞍能
 どんくと看官の法具身あはつりが
 大郡と書房が欣喜そまのこ偏み
 願ふと云爾

東都作者 為永春水誌



全助ハ
 和七と
 實名七
 相原江助と
 同居あり
 生町小飯住と
 商人と密書を
 敵軍の様子を
 八百屋傳ハ大星岡東下石町小
 旅宿ありを
 老臣松原左仲
 其趣意を轉倒させ
 即智とて其の裏ハ
 本文小委
 三三三

八百屋傳ハ



倉橋全助武幸

秋の夕路

とせ宛

淫婦於蘭

於蘭の
 本
 委

上嶋門弥

此年十五女

父子とも小

大星が復

盟約を成せし

退散ありし

倉下下り武家の

長屋小僧居せし

風雪の下小高き



空の文太比...



復讐を成し...

萬一仕損ト...

江助の妹ハ糸竹の老女おきな小妻こつま〜
 浪速の親族の家小成長おさな
 今更いまさらの小唄こ唄ありど
 妙た小妻こつまけれバ
 小唄こ唄東あづま小唄こ唄
 伴ともひまり唄うた女め小唄こ唄
 出で扮はせ本ほん莊ぢやう小唄こ唄
 借か家やありて酒宴しゆゑんの
 席せき小唄こ唄且かつ渡わたせとせしり
 好色こうしきの師し直ちか是これを傳つたへ聞きてと
 ろえんと言い入いれけしど更さら小唄こ唄後のちより
 けしども強つよて抱かかり入いり度ど皆みな達たつて望のぞむ
 けしど是非せひ非ひあり屋敷やしき引ひ移うつり体てい先ま
 間ま者ものとあり高野たかのの様子ようしよを密ひそか
 江助えすけ言い送くりしとぞ



唄うたの
 小こ雛ひな

相原江助宗房あいはらえすけむねふさ
 松屋五兵衛と夏名と結小切を賣るまつやごべゑとなつなとむすこぎをう



四合

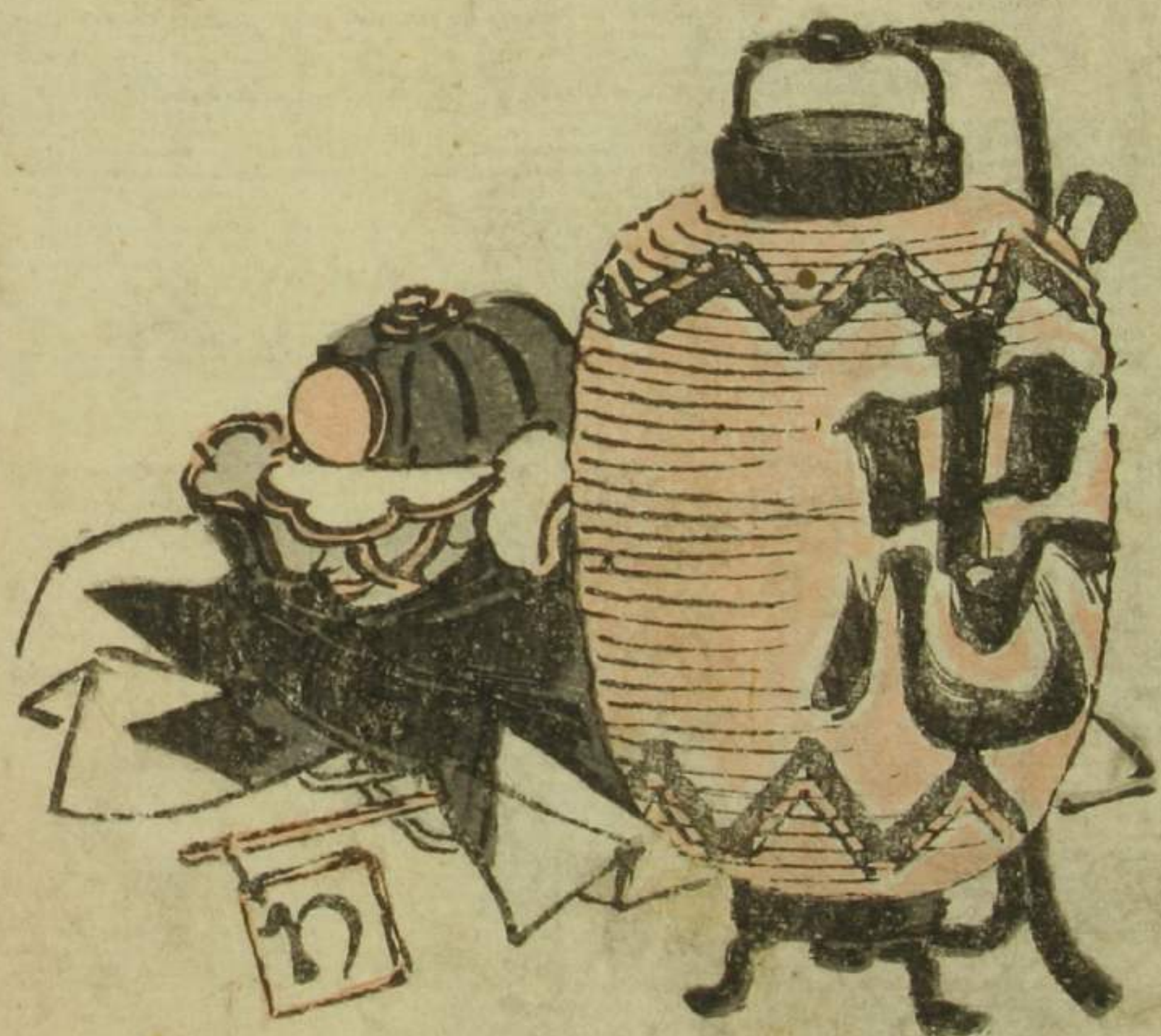
恩故相思

今到東

是皆勇義

通胸中

忠義



正史せいしの乃は文庫ぶんこ卷之十三
實傳じつでん

江戸 為永春水著

第廿五回

収と廉れんの臣しんはらん上りの寧ねい盜とう長ちやうはまると古こ人の金かね言ごん
妙めうなるるる俚り俗ぞくの詞ことばふ言いふとまに親おや方かた思おもひの主しゅ倒たふ
夫おとこ侯こう物ものと名なを付つて賭かく賤せんしきかまう一文いちもんおとりの百ひやく換かへ
塩しほ谷やの老らう藏ざう夫おとこ居い申まを右みぎ傍はたの藤ふじ江え勝かつ右みぎ傍はたの両りやう人にん時とき落おち
品しんも交まじへ金かねをつねぐ結むす齋さいすり筒つつくらら秘ひ走そう夜やの物もの入いりた

嘉元 御身の大事を思ひ及び金銀を大事に公卿
兼り格番が免あまらば後身を君のせしむる最
勝むべき似而非儉約そもく塩谷の滅亡の師直め
取らばし七矢居と塩谷の西人が所為の登りし大登
ゆて未遂を憂ふと大星また戦官の振る後の人の
批判をせむることを悔しけし備も大星由良を助は度
主君の血後義を伴せしむひりかひしと國元を聞
よりいそぐ塩谷なる新井新七弟といの者を呼かす

由良 其許ハ大愛より此度鎌倉へ赴り一丈
の義を相勤めらば是よ尤いとさの四月るれば
明朝まで小為地を登置一日もたやく鎌倉の
山屋安へ来り矢居と藤江の西人小對面のう
け書状と相とすト言ひつて側へ近く我ませ
新七弟が耳に曰 由良、みな得かがまぬらう
畏りまうとてさかまは 由良、合突がゆさ
路利のさるも山用の金も其がより相とす

うらぶとふもそとち森忽しんくあるみト支度金しよどと七十しちじゅう八はち両りょう
主君しゆきんのごよう出用しゅつように二百にひゃく五ご新しん七しち希しへさうしやうのつらのつら
尾およくよく勤つとららりりままのの新しんへへお目めががねねととううののひひののまますす一いち有あり難がたきき
たたししららふふ以も母はは報ほうととととぞぞんんとと七しち相あ勤つとめめままままひひるるををととととううりり
まませせううトト慎つしんんでで金かねととううけけととりり我われ家がへへ評ひやうのの儀ぎのの用よう意いをを
そそのの又またてて其その翌あした日ひのの朝あさももややくく藤ふじ倉くらへへととをを毛け下げりり大だい兵へいのの
内うち意いののごごととくく掛か合あへへととをを信しんじてじて由よし良らの之の助すけのの新しん七しち希しにに
委まかせせししくく言こと付つけつつららいい一いちままはは先まづ安やす心こころししてて目めをを見みてて

家いへ早はやお役やくも首くび尾およくよく相あささもも君きみ心こころもも以も安やす保たも持も
むむししつつららんん同どう出で度た吉きち左ひだり右みぎののむむままととははむむけけらら
その所そのところへへ願ねがひひのの境かたのの役やく人ひとよりより先まづ觸ふららててままをを
弟あに早はや馬うま城しろ門かど際ぎわゆゆをを登のぼ高たかくく山やまにに進すすみみくくとといいつつらら
多おほくくらら馬うまよりより花はな下げりり一いちぢぢののううををんんととままををねねとと只ただ今いま
藤ふじ倉くら表あはよりより早はやううららのの山やまにに進すすみみとと原はら々々在あるるののどどのの
押おし付つけ是こゝへへトト言ことふふととははななりり番ばん士しのの頭あたま 重おもくく藤ふじ倉くらのの早はや
ううららととるる元もと老ろう方かたへへ申まをすす侍さむらい侍さむらいああるるややとといいふふののゆゆええとといいふふ

田休良はまにヨト役所をなれ籠まを直ふ藩方へあふ
世の使を多かき命の危らむ所へ又もを来る早馬
ゆるりゆらんと城中の町人家中の人へ一固の物と
うまもかく二夜目のうら城門へあがりつけあふ
大音ひけ 二重のうまゆらよりの早うらうて大望
瀬左藩のどの只今邑へ別着七ごうりまはト
時に外廓の家の中も近き六園つけ七仔細のあふねど
藩にまじり各々四門へ並出て案ト頼るものまじりへ順

かの境の早馬引はひて宙を飛する早うら城下の
人も兼せよう頼をかりするお家の重役原をなす
元辰をかく籠の守護とて數十人大地を踏立る砂
煙う「エイサクく」「エイサクく」息をとりませあふも飛
ひを只大勢のいさむあて路へあがどふあ物なわら
ぬい肩あがくの人はあしをそろけて城門へあふが
如くふせせせり町家へ軒用あ出てる家中の平生
あふごとくふ周章のあふも用ひを捨てて残すこと



清のせき獲りて「エイサア」く「エイサア」く「城門」
うてらうと入心其のまののまきまき城の城下
自ら後言ふとく大愛ありあつく用ひのま下
よのせんと愛情人あつまぬ壁をむののまが今に
軍うらうまの板の周章人もまくるる灰よと
混雜し易き心ありけり此時大星由良と助の
才一番に城中へ馬を飛ばせをむり入り津定の津定と
そ又諸士の出仕を結清て今刻の原大を

み抱きも深きうらけりけるが遊ぐ出仕の諸家中へ
主君判官の切腹の極子と披露ありけり上へ
一同顔色をうつろひて言ふをせむものさ
果てとおのく忙然と忠義一途の着のほろ
長死をと故人の教へる今にまき一四主君の切腹と
あつらうハつて必死の覚悟の外別れ思ふ事
城を枕の御守よく死のまどが

又左衛門 二入分 豊一 此を交りて只今より一刻も
早く鎌倉の巻下りす野氏の落着を促さけ
さ由取つて返さるよ夏下等 一人のは進次者諸士の
覚悟を相定めん 今日より七老かの面々の
結切り物頭の前へ殺取とて相守りて再度の
山沙汰を相結さよ又山家中の一同の武具の用
意の沙汰断つるまづ 今日一且退出の事なれ
ト言ひし事なれと一同の宿野の御師の言より

邊の注進師直どののゆるりて麻養生の作を
参り判官公に六の四後の翌日まぐみ鎌倉の三
座安を召らげらば諸座中よりぐむとくみ途
方を其の浪人と相なりたる勅書を今からくみ
彼よりも苗をくみある一家中を我が運命
尽るともあり今更未練のおしをとりて世よの人の
物笑の臆病のものと云うるは際よく討死して尸を
當ぬぬと云うとも忠臣の名を末世に残し極むの

お家の終りも七君と云はば臣もまた道交へて終りては
 志と言ひしとせめては男の報の如奉公の為におさせ
 下互ふ公の令と同士に鑑物具肩あけ階野とへ
 志をまきた城下住居の家の中よりこより在り野に
 住居の役人塩濱役所の人をま七後見の鬼もは是
 一旦の勇氣の立し侍も氣負統城まさんと勢ひ
 込ん心あ後をあらそひ鎧引提燈を奇勇の城中へ
 我おとらとをせ入るる最ぬぬしととももあつと

第廿六回

再説塩谷家の城中に六代良頼の人をうらむの
 支度にて互ふ公を合めは是れ兼て同士の忠臣の
 遠慮もあらふことを弓矢の用意持差と今に
 ある中に撥ぐがあらはれと寄合ひ、望
 候し私欲をたたく不忠あり物頭は迷ふ
 ののらば倍居め必死をまらぬし其家傑あり
 重役の面々ハ先城門の下如を殿しく言月入の

者小油断世に又城下或ひに在る位居たる諸家
中の属くが色居るを別を死に殺入門外ありて名
番をちぶ入城帳へ名を付るに居る所へ遊々ある家
中の介めをり集る者もまくなふに申にそ業と覺
悟をあるがごとく用意してある者三人ありてそ業
岡野法をま。井園徳を清。大岡林をま
右の三人の塩谷判官の勘気せうけ七浪人しる者
ありし武道の心づけ頼母しく故主の妙法を圓

よりも幕城の中に加つんと塩谷の城の門ぎらに
来り姓名を名告てそのとんと看別帳へこといまづ
眼付イヤ内入城のまが暫くおの久もままイヤ内
ざうの通まごるがら一旦浪人のするまは別列の連
は記しがふ存かす大星どの、中付で先列
く浪人氣の見くらまもほく明りて入城を
ひこまむび懸く帰くま、各方もおのれの
毒まら三人へるるやど由尤のさりあうるがら批者も

必死の覚悟で是を七柱一應の義を文里氏へ
お仰せける事にて下さるイト思ひ格も其面を多く
立歸り侍るけしは是非多く大星へ新と告げし由
良の舟が是より七柱公の侍一人門赤の豆出候
扱し七入城の事ひ堅く断り義公のわざを感出候
ある一よりと七三人の者人金子と衣類を以て所を
書留め後日内意の執きを通じやるものなりんが先
まが今月八日歸るべしと理を尽し七言聞せけしは
治を先候を流し 今ふらぬぬ先老の仁公浪人の
便を先ふりを思ひて此大變の内最中にいづくの
志をお捨下さるべきと何門に如抄の賜作のあさぐひ
まして有受のいさしまたんが由評定の定り次第は
とも内意下さるやうに 三人へ頼と入りまたト
カクげぬぞ歸りゆく此時のまき鎌倉の三空交に
在りし家中の浪人し七身の後義を免や角と棄ト
燻ふその中にも忠義一途の人々の妻子を呼へ候

治を先候を流し 今ふらぬぬ先老の仁公浪人の
便を先ふりを思ひて此大變の内最中にいづくの
志をお捨下さるべきと何門に如抄の賜作のあさぐひ
まして有受のいさしまたんが由評定の定り次第は
とも内意下さるやうに 三人へ頼と入りまたト
カクげぬぞ歸りゆく此時のまき鎌倉の三空交に
在りし家中の浪人し七身の後義を免や角と棄ト
燻ふその中にも忠義一途の人々の妻子を呼へ候

おき遺物具携へてお國の城を死所とを死する
忠臣義士同じ時刻の糸糸糸一城門の近付の家
中と見ども初の出入顔見かたねが相互に森相の
るもめらんうと門番所にその由おせむ一人を改て
重役へ順達するゆゑ時刻うりておひれは城下は
町人百姓追々おきせいらり用もあつた義兵へ
お作付下さまよト村長里の長るんと軍刀のゆかり
受するの美くしくお立具を携へ勇まげお組を

立てひえう此時のく貧しがりる衣服を以て紺糸の
鏡のおぐ糸のむらさちぎれて古びたるを肩お引りけ
をせり入城せんとお言込どもお別れおさうくおあるは
けりおもむらさちおそ鼻の先を會沢その見苦しきを
おびおのなまも自然とおさえつ又おびけつて叫くもおえ
よう一の傍り言実や世間の人公悪るうひとも悪くお
古今の人情あるうへへ今お別れ預の浪人の余り
見苦し形おア何とゆい人うへへおさおサ飢死せざる



よろろ城へ這入のそ 苦糧でも 江山喰ふとらふ了らぬ
らふ べイヤく 籠城と 兵糧を喰つて 腹を丈夫に
花々く 赤尻 さらこののさぶらまぶらまぶら 然ぞ
さひノサ べそと 何とらふ了らぬノサ べそと
のの常世の内を べそと 常世と 誰ののぞ べそと
岡分のころひんご 鉢の本の文をさ 何とらふ了らぬ
刀ちぎれと 籠通と 餓鬼の大將軍 佐野源左衛門
はるまひら べそと 餓鬼の大將軍 何とらふ了らぬ 瘦馬

にも 常世のころひんご 餓鬼の大將軍 何とらふ了らぬ
束の人の了らぬ 何とらふ了らぬ べそと 悪の了らぬ 何とらふ了らぬ
刺三人 束の浪人が 奇特と 何とらふ了らぬ 腹を丈夫に
衣類を 下して 何とらふ了らぬ 又 腹を丈夫に
何とらふ了らぬ 近付と 何とらふ了らぬ 何とらふ了らぬ
推量と 何とらふ了らぬ のの常世との 何とらふ了らぬ 何とらふ了らぬ
ト 異口 何とらふ了らぬ 何とらふ了らぬ 何とらふ了らぬ 何とらふ了らぬ
隔し 小高き 何とらふ了らぬ 何とらふ了らぬ 何とらふ了らぬ 何とらふ了らぬ

刻順ふ城内へたゞる姿と養へく見送るは奈何
ありけん見まがらうげぬ在ける新へ城内うらまはる
立流の侍小野寺十内なるうみ城下を見たりて 十内一唯
今と見え来らまはし中に不破務右衛門どののいごころは
ぬる元老大星の先刻より待たねらまはしうら不破氏の
来らまはぬうと言は着別場の役人も不破務右衛門
どの不破氏と噂する変城下の管まき入る四方を見渡
きて待たねらまはし入まらるる勇士の分まはるるかえん

と互に見まはし其折しも彼餓鬼と誇らまはしうら
依然ととまはらる城口へ道すがら小野寺の令歌と
十内一是のく侍右衛門どの大星氏の所存まはし
大宴を聞きて外りたとき直に早速の志まはし
お心がけ通のまはしんまはしイザの周道やまはし
是て不破の肩身も廣く笑ひ誇りし人を見
うらまはらる城内へ侍るまはしゆくやまはし
今も侍るまはし 今も切せ身を隠し 掃

一の荒者不破勝右衛門にせりけるつと時...
導せり初て大早く勝右衛門を兩三日城内へ止り
おき内々の公定まりし後金子とりて入竊る
内意を立ちり合せ先達せて鎌倉の地へ下せし
とぞ斯てまご城中に筑城の覚悟をなさんと夜
中の人々廣間へ集まん彼是杯をとり中向日
頃六武勇の公がけ才一たりと賞せしむし向嶋
八十右衛門の如りせしや昨日我家へ帰るし

影を見せし其侍輩の若様しとて向侍氏の影
のしとらうナ一落早出仕の由をいさるるが
みせりしと互に同合ふその中分れを受のむ
ひとしと松島若人既喜しと一イヤ向侍氏も命の
うる孫の如く日頃の勇もいさるるまの跡の
城の討死のとやりの命りまはる許りあつた
り鎌倉の市中かを鎮んて義人の家再興
忠義の才一物さるがしと

重なる道理向流氏もすうふあとの了るる心は
其のら若きもさくぐ亡令せり
望せけり多し身傍を言ふも心の余り多し
是を團く美心の若き有二三人進む力でもより不
向流多宅へまかりて物ありま体も
見憑しりみ村殺しと捨たま
似合ぬ様あり者傍軍の面様
異んと血毛の面々向流が宅へ毛のゆき八十石あり

やむせむと喜ひつて笑へ満込と見え
家中中を引らしり一実の近海でもす
から居間へ放しつてあつと見
より泊り更早の用の意を
物具を様々公様へ
所へ行しりるぞと折
運上り取らりあり海草の
灰も田の土も其類の

ける要也向の車と言付換上る色まの籠城の勢
 けゆるるべき品を被色と云ふ所の車のおり十金車
 昔時のふるみ観へて城中へ引込るある人の心づ
 ざる用素口めちちとも言おまねど必死の覚悟
 たるも此の心づかぬ心づかぬの心づかぬの心づかぬ

正史 いろは文庫巻之十三了
 実傳

正史 いろは文庫巻之十四
 實傳

江戸 為永春水著

第九七回

古人のまる夏なり解人の其身を毫も人の為
 容を粧ひ士己を降む者の乃ふ死せと宣うる
 極公判官守貞ハ君臣の縁義云く殊不慈也の心
 厚く實情味き性よりけは六道を守り極は老賢を
 思ふぬいあらぬ世にも又ま性の好曲の主なる人の心

勝と物と賜るがなりなりまは終の如所の命を捨て
劫定に食らるると思ふ中なりもゆりしを然バ極谷
家の城を退去の時小隙ん口主君の憤死を推量り
殉死せんと決まる者二百六十余人ありしも血判
同盟の約束背く者次第に多くありゆきて病久僅の
早余人は金を金銀の忠臣も士ま到侍の世の中の死人
既山ある所にして今又謂んもとあり直と片岡傳八藤の
孝房の一條ハ世に傳はざる異傳ありきまも所ハ條

今山家通すまも所なりま少くもるまで己午の
身を忍ぶに屈竟と思ふ月池の現法洲の四藤ハ
遠き借家任主従二人の浪人なり頃秋の末らるる
本々の相ハ紅葉して降る貝肌も疾く晴る貝空
青々と海面遙不真悦片帆出船入船紙間るる三眺
砂岸ありぬ上は急浦折るる一夢の古々のと様く
流石の人情捨がけけまはま孝子のありき野くらん振るる
近くををあらせまの片岡傳八右衛門の妻の末より



志の房も鷹取峠のお日記より二の廊の備立の辨判
と道國までも當る學がたそいでおびかきとわくでも
右左傳つさぬのゆゑと軍師の隨一ととやとそふでおび
かき依イヤまハ左様とモウ日かつあまは秋の日
い少一の房も由緒が成ませぬドレ方焼の支度でも致
せせうト言ふがら勝負の方へきて行西へ入日海系
も水色を黒くりの淋しき浦曲むまかみ波風も身小
まらんと衣れげなり柳は片園ハ安き徳貞さんどくお三

人多くの人々先達てとわくわくし一変るはとバ火
急のは度お何も彼もまらぬ修りて鎌倉お奴
居まる承自使サ揚難美のを解へ願ふ残せし片屋が
おのりとりけあきまきおごあかん
お初元助おね来て傳入を橋の浪宅のちりうと
夕つて暮をせける斯る所へ門の四三三人の人考して
ハイ望お頼とやまは片園傳入を傳つさぬのお屋居
此方かてごごかまはりト音信お女の園へしお
元助ハ二階より降り物申し用をたせたるおや一向に

関がねバ 傳へ在落つさざり出 一ハイ 雅成をさるすは
「且那さぬでござるかまきりヤリク 購わへイ元助ありて
ござりやまはお國元くらに新様さぬのお供をいさしと
まかりまきりト言ひながら宵夜を振向へずは新様振
此所が且那さぬのお仮住居でござりまはお小児
さぬがごサヤクお父上さぬお逢ひなまきりませぬト
言ひ且を落しく片岡よりも表の方にてる供の娶
一母とさん 爺公さんのお宅でありまはとサ速く

お遠入るまのヨウトりの愛と侶供は片岡の妻と子に
門よりをり入る黄昏時の家内の体やまご方様を
てらさねば不案内なる夫の家あるとい見へねど不
自由とおおせらまきり居る 傳へ在落つハ勢
縁眼にて見まきりども見ぬらご家の内國元とさる
元助がまきりさるぬ今の以上妻子を連まきり國
許より来るまきりといふハ合ふの不行と思ふなる
まきり懐しき妻子のまきりむらまきり 片ハ元元くら

妻や悴が来ることと云うてくたやと見ても洗ふて
 此方へよすが宜いもののは身の眼病は又文春
 くるは時明ぬす所の桶の水もあつた吉豆を洗つて
 サツク此所へ去る貴公のお眼がまごそんるに
 お悪うござるかまはりり窓茶元辰さるのかは
 お岐方と兼りましうござるに 左ハヤある程先達うら
 目まじり窓うらう丈夫丈夫はうらうこので女ハヤ然う心
 ござるまはりトあつていふとまはりの機屋を因り

ませび室の懐りうぞんどもまはり事四不自中を
 住人まはりうのふ誰人が羽文の四版の酒桶を
 のこしと進まはりやハヤ食の外の用向の元助が
 甲斐々々しく働ひて異るくら交はれ少くもうらま
 るので女ハヤ元助とお母のまはりまはりの思ふ
 供ふ連てまはりまはりお利謀の元助と同一名の
 男をおまはりまはりまはりのまはりまはり 左ハヤ
 かまはり元元でつうう元助もやうう考へるうら

月七休日をまらぐよひお位代も藤の芳で太
 美であらう遠慮うふ思を知りて休まらうと
 言ひつゝ二人の子どもの脊中おまの花より
 うと秋の雅面を見るふつけ古く思ふ思
 のも元助が二人あるり一異変さるあう
 まどふ不思議なるりけり

朝鮮キョウセン 牛肉丸ニクノマダラ 一色百銅イツシキヒャクドウ 脾胃イを補ひ腎精じんを厚あく天妙薬テンミョウヤク
 名方ナホウ 十色二朱ジュウシキニシユ

第廿八回

製弘呀

江下谷三味線堀

對別本表 深濟氏

古より形容両体りやうたいのうろを懸懸病けんけんびやうと名付なづけた多おほく入
 書残し七しちあるのそいもご眼筋がんきんの見しとゆふこととを
 倭やまと本ほんにもこの院跡いんせきを西にしく著あり
 たるを見し度ほどなり但たゞし奇疾きしやく方に白人はくじんあり七しち

自ら形容兩人とありて真候を別りて言ふ
同金も着るるなり
同金も着るるなり
同金も着るるなり
同金も着るるなり

硃砂 人參 茯苓

右の三味を濃煎して湯を振せしむる氣爽なり
候中の形ハ消へく元のひよりとるまると記して

あり思ふに痛ふよめて形容兩人とありの
形容あるのよにて言語なる一是肝經の虚候
邪氣ありと云如形ありと云六元助が二人とあり

りる難候病の類のあはれ候なり
どや然きども兩人の元助が
今あり一元助の格子町
候もく出て行ば家内の居
元にて飲食の相違一人世
夫婦の出入り候
アを元助の怪しき候と
國免の物ぐるり候時別



行長
の下僕
の元へ
さしづる

すくとさきより夜食とまてめさせらるる道中の
子を問ふは西國元の咄とんとを言出してさう願
の物語城中城下の陸彼が新すまのありける
言毎度小一点程も胡乳の旨趣あらざれば何れ
を付て容態と見ても久しく別達の元助お少しも
不遠疑ふべき体いらさるるけり新でさきおは
後み人寐りの語の中夜更るまで果もあらは問
問ふ二人の子どもは恥しくき足の左右小海窟へと

夜中の目も眠るべきや公よげの眠るを見えなむ
にそ松さきさるまの眼病見る妻はその不自中を察し
ば、いと胸え痛るるべしとや元脚も膝の
ゆて眠り入りたる息づみの四辺も静なりとく
枕えたる蓆荷物より大星のふ紙を出して小愛の
ことを讀聞せ懐中の胴巻を解て金子と取
片岡のふにこそ一 女 其三十あるまは方へ
くらふ為とてを巻まると外小私の路用おせ

がわまたぐ急の御達より一ねまはるるりる先入の両
お返すやまた残金の出精のしとお返すや振の返す
ませうト一置直に持て来るこの原お前さんにお聞
ひさびさ取をうらひませう後目にお比り成を
思ひ多しもお困を直退く私等を森略の思ふ
公の儘儘もせぬ金を持て来るこの信切を感公
のうまの思ふ西の金を清かりて十両の宛文を
太事作お返して参りますよト金を渡せば片圖の

たやまの思ひかけるのしるる分振し七くお家の
大を夏を事ひお不安を働く者が城内にもある
のふの願分の中にも遠の祈心知らぬ願をし七居
ても海のおけ方の雲霧を聴ひて半合もももや
返すよお宅の有りかたの心ざうご願く宛文を返して参
るやうに女へく上置文のしるまはるが願く残金も物
多からわけて且那さぬをお尋ねやまはるるる時へ又
残金を支角しとお返すやわげまはるとやまう

正史 實傳 いろはは文庫卷之十五

江戸 為永春水著

第廿九回

ひり 昔の 実の 書を 残さ こと 書い 言ふ も さう あり 後 の
 戯 書 多 及 古 も 幸 あり こと あり こと あり 物 ぞ あり
 然 忠 臣 孝 子 の 筆 の 跡 の 世 々 々 に 懸 り あり
 たり とも あり こと あり こと あり こと あり こと あり こと あり
 中 山 人 関 書 文 庫 号 大 星 が 復 仇 の 存 在 四 十
 廿一 号 書 あり こと あり こと あり

朽^くぎる^ぎがごとくと論^{ろん}じょう

云^いゆも^も早^{はや}ぬ^ぬ論^{ろん}ま^まら^ら残^{ざん}口^{こう}の^の交^{まじ}を^を好^{この}む^む者^{もの}六^む石^しの

碑^いを^を是^こまり^りと^とま^まる^るう^う南^{なん}が^が小^{せう}新^{しん}田^{てん}柿^{かき}の^の名^なお^おわ^わり^りと

庸^{よう}泉^{せん}の^の豆^{とう}利^りを^を形^{かた}る^る日^ひの^の正^{せい}蜀^{しやく}の^の孔^{こう}明^{めい}あり^りと

玄^{げん}徳^{とく}天^{てん}下^かを^を一^{いつ}統^{とう}せ^せば^ば大^{だい}星^{せい}の^の才^{さい}智^ち忠^{ちゆう}は^は古^こ今^{こん}に

去^き類^{るい}あり^りとも^も由^ゆ縁^{えん}正^{せい}仁^{にん}心^{しん}深^{ふか}き^きう^う真^{まこと}の^の家^か

只^{ただ}一^{いつ}時^{とき}ふ^ふた^たる^ると^との^の大^{だい}凶^{きゆう}變^{へん}あり^りと^と豊^{とよ}大^{だい}星^{せい}氏^しの

難^{なん}癖^{へき}つ^つけ^け七^{しち}是^こと^と碑^い正^{せい}へ^へま^まり^り又^{また}そ^{その}の^の交^{まじ}を^をの^の七^{しち}師^し

号十五三

直^{ちよく}の^の汚^お名^な後^ご世^{せい}の^の汚^お人^{にん}を^を洗^{せん}す^すの^の疾^{しやく}苦^くを^を差^さ別^{べつ}

の^のち^ち々^々天^{てん}下^かの^の人^{にん}の^の汚^お汚^おり^りつ^つけ^け七^{しち}城^{じやう}を^をま^まり^り美^み疾^{しやく}

の^のち^ち々^々一^{いつ}曲^{きよく}つ^つけ^け七^{しち}汚^お人^{にん}の^の他^たの^の異^いを^をま^まり^り智^ち巧^{かう}

の^のち^ち々^々思^しひ^ひを^をま^まり^り汚^お人^{にん}の^の他^たの^の異^いを^をま^まり^り義^ぎ士^しの

真^{まこと}跡^{あと}の^の汚^お人^{にん}の^の書^{しよ}状^{じやう}の^の写^{しゃ}を^を出^だし^して^て本^{ほん}文^{ぶん}の^の助^{すけ}と^とす^す

○義^ぎ士^し對^{たい}話^わ小^{せう}曰^{いふ}

家^か森^{もり}助^{すけ}を^を汚^おつ^つ人^{にん}の^の存^{ぞん}生^{せい}の^のう^うち^ちに^に位^ゐ牌^{はい}を^をし^し

ら^らて^て麻^あの^の長^{ちやう}延^{えん}る^るぬ^ぬ處^{ところ}より^{より}一^{いつ}黒^{くろ}塗^{ぬり}の^の金^{かね}

母養身書子之
儀儀家也 可然極
皆 極江身也 未也 作

八十五

心
上

寫成助右海圖五

年
極月日



天地の外ハ何れもよき種ごふ 芽聖和助
 のや 嘆く 野辺に 枯るゝと 夏入

一筆波の上の重荷よ 亦迄の左たる美の香を
 有との寒の氣甚だたの首の根の内結の根の根
 只今をよき思存存のまに地邊の中を流の
 情も 願う 不後亦存存の内 存存の候一筋お極

相貫の於世の此書中 陽の
 眼元を 別るゝ 山残まの
 時と及びるゝ 強きりよん 人ゆも 勝と本を
 通勇士ぞ 自勝存のひ ぐ不目と 令迫るゝ
 存の候 落候ふもの、あの 常に 不結合の得とも
 於宮の 初と 唐と 契増 抗業と 公郎 殿着 あり
 中なる 浦の 影る 葉 枯るゝ 候と 候と 候と 候と 候と

此の書は... 一筋の急ぐ身... 公早... 此の書は...

今度必記一連書月... 掛ける中...

四十八人別紙有る

欠落者

中村清左衛門

日向重八郎

中田利平次 十一月九日欠落

孫右衛門 十一月六日欠落

田中貞四郎 十一月四日欠落

平野半平

大星氏... 代金...

可成り... 連中を退... 可成り

十二月十一日

降常川初平

宗利

延吉藩の極

利吉藩の極

小三郎極

くわの極

〇〇〇〇〇〇

〇 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極

〇 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極

〇 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極

〇 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極

〇 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極

〇 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極

〇 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極

〇 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極 延吉藩の極

武士の道と云ふは一筋に

思ひまゐる死出のやまも

○早水藤左衛門の川家ありし早水助左衛門の孫あり

彼助を流し後浪人として終り古所光明寺に引入り居り

其が東の御徒を同く藤左衛門を尊ね浪人の役をまゐり

金子を儲け好むと云ふこととて光明寺に即ち早水着衣

清つがその光明寺に送りし書中に

地ある火風空の角より出る身の

たをらへてはるがの住家に

第三十回

風間喜左衛門光延ハ垣元侯の藩中よりける中書又物

とふ人嫁者よりけしは辞世を送りしこと

弟を死にまゐるが縁の妻ありて

こと世の久に春の曙

中梅や園を突ぬくその白ひ

風名新六の死骸ハ中堂氏へ送られて吊ひける喜左衛門

早水着衣

喜左衛門

重次郎

の妹伊津女との久古今稀なる女ありと実母
の妹伊津女との久古今稀なる女ありと実母
の妹伊津女との久古今稀なる女ありと実母
の妹伊津女との久古今稀なる女ありと実母

多うち縁の廻のころ思はれりては猶悲しう

□ 延十六年二月の初亡君の御志を辨へて

を後切せりてと聞けりおろしき事よ義理とも

別ごま中に家に居る身ものまひりて忠

孝義の道めて世の名を後しめりて武士の

黄のうんと思ひの履もて

君が為ニてかゝるものへの

命は持て名を残さるん

中寺の清きうしふ四十余人の人の増長女の
同る氏名風との人なるうしふ名も身もまじ
今もあつるふき人の姉のうしうりうりもてか
智識の増を頼む葬りうのあけ所ゆへるま
うのあつる後る妻女にうしうりせびもうり

伊藤女ハ
 光陰の
 光陰の
 光陰の
 光陰の

三七日ハ勝るるのありて乃て四七日寺にて

思ひまやその名くを書こけ七

ひより蓮の人を見んと六

此の有りてそのの西海流をどありけるか新六

光風の戒名を双模唯叙とありて人と同ト行ふ

舞舞波を立せとありての有終きりのおおひい

ありて誕生十日十七日ハまりつるのありて乃て廿三日

今日八果の日は是バありてもありぬも貴成群集

速くもこの月日多と光陰のうらも最うな

こと感方とありて人バ愛まらるゝとも毎へが

夏の世りしあや見えこととをなけき

ありてまらるや人へおもらげ

逢尼一人ハ墓所ふひるバまはれもうつる公の

ども双模唯叙ハ見ぬるのまはれに人るまんと

付きつるまらびりつるおとまゝく吾妻へりまんと

思ひとどろが甲斐もま



見ぬ人とてんをそとるるまき苔の介

そとぞとをうり 續もなり

逢ふるを祈りけん 五早極

神ま今へうらやの世や

四十余人の人々の法名の上は双とゆふ字をすて下に

劔と並のひふははとも双と拂ひ共のゆいとうや最

中うらや

この章ハ猶長けきとも器と七死さび又義士の流書に

稀なり又ち小一奇流なりけりゆめちくの義士侍江地ま

尤中流なり

延喜の年向 隆泉寺所 本立山

長國ちとゆふ日蓮宗のちありその地内川の西の方の寮

りて賢了とゆふ傍の住居しが此傍ハ立林住七の坊

なり又其所よりやと遠くぬ借家ぬ六十余支の尼の

聴くくまらるが住居七おろけ賢了の庵へま住るるなり

是らん立林住七の妻にして瓶討の節は六一たすの

秘密の役を勤りて一女あり

谷七々の町山路の所も物もあつたを本舞も賦りて

羨ふ言ひをくせし丑満頃月いたましても降つて雪の

夜道のあまうろふ光輝あつたを園より八却てゆめく

怖しく稀なも性来の人形なく犬さるるぬを餅しけし

寒の高野師直六寒をれお冷く小あ近く衣更て深

折へ入るるを裁度とくく雪原へ側女中ふ女抱されて

通ひしが丑の上刺と思ふとる二人の女中に侍るるは極例

傍ひて園の行き両戸を明ををむせ洗ひ室を見とて

いとまがらまへ老女の化粧あしと入る冬月物

凄しくあつたけとどは雲甲の月の景をくく風

雅な泳りてくうのう 四景の通りていふまに昔う

いとまがらまへる仲秋の月教も曇りぐらなる海世のる

今宵の空が秋をくく入の景ををいふまに夜

風が四身あつたうろまをいふまに八月のまらふ

あで 寧くもくひト宵の願をくまに不現や元来着

かたね身にまきとふ寐るる夜の白雲姑さむらねん公ハ禱
者の癖ありる庭の松が枝はもの花実ハ月雪の三葉を
一時ふまひるましと暫内海側ハ跡居のおも
有婦人女中が深く遠くあり洞湯桶の蓋ともに
その縁側よりは水流の下へ取落其後さるあらうら
ひらりとあらふとふとあらせりと洞のひびくせ合あふのごとく
神祖の後よりきり出縁側へひらりと籠める真黒
出立の一人の曲者忽地刀と接しよりとあらく呼直りけけ
とらは十五と七

打てりまた呼直ハ勢天一まよらんとまる野を二人の女
中ハ左右より飛うらて呼直を引捨一押伏んとままさバ
強もの呼直身とひわり移りけららう声とまんとあら
け目六二人の女中ハ周章ハ呼直の首ハまづとつき
一人の女中ハ呼直の側ハままとうけららう首とまら
うとまらてまサハは後ハ早くお首をままサハくままらく
お持たして出らうト言入ともは方の恐びの者ハ刀を持る
透るらけとバ小女にさうととままらくままらくままらく

色も然もるけまはるき方連まも由病を清七怪我の元
 へも流も重しも解ひまかぬ可人中に時直ハ二
 人の女を掃もるがら一主人の向うに運載わすとらひ
 除るを放さすと控重り七ゆり袖と師直の口を押へ
 声まをどとひらまひけり

正史いろは文庫卷之十五了



